



[講演]

大学の国際化の 観点から期待する 日本語教育センターの プログラム評価

国際化推進機構長、経営学部教授
山口 和範 氏

○山口 皆さん、こんにちは。立教大学国際化推進担当の副総長をしています。もう1つ肩書きとして、国際化推進機構長というのがあり、池田先生からの話で言うと、副総長という肩書きは外者、一方機構長は、国際化推進機構の中にグローバル教育センター、国際センターと並んで、日本語教育センターがあり、内部者となるかと思います。機構長として、月に数回、丸山先生とは一緒に機構の運営会議で一緒にしております。ですから外の人間として、また内部としてということで、お話しをしたいということと、池田先生のひがみを、どういうふうに取り除くということが、逆に言うと、サブタイトルのほうが一番今日は重要かと思い、立教大学が国際化を進めていく上で、日本語教育センターに期待することを主にお話しをしたいと思います。

今日の主題は、プログラム評価ということも含めてだと思いますが、私の役割としては、主には大学の国際化と日本語教育センターがどう関わっているかということをお話することかと思います。なお、教育の話をするということで、はじめに自分のバックグラウンドをちょっと話したほうがいいかと思いますので、簡単に、自分自身のことについてちょっと話をします。

池田先生が働かれていた某国立大学に、9年間、学部、大学院といて、立教に来る前は、ずっとそこで学生をやっていたのですが、専門は統計学です。理学科の数学科出身で、大学院から統計学を専門にしています。実は統計学というのも、池田先生が持っておられるぼっち感というのは非常に強くて似た状況です。海外では、日本とちょっと違って、Department of Statistics というのがちゃんとあります。日本は実は、先進国というか、世界中探してもなかなか珍しい、いわ

ゆる統計学部統計学科を持たない国です。これには歴史的ないろいろな経緯があるそうですが。

もう1つ、言語教育の改革と同じような形で、統計学というか、統計教育についての改革ということ、自分自身の専門として取り組んでいます。専門家を育てるわけではなくて、統計教育をする場合は、統計を使ってもら、それ自身が目的ではなくて、専門教育もしくは自分の生活の中で活用するために、統計的なものの見方、考え方というのをどうやって身につけてもらうかということを考えています。多分皆さんも、統計を使われていると思うんですが、だいたい受けてきた統計教育、何じゃありゃと思われていることも多いかと思います。実はこのことは世界的にそう変わるものではありません。アメリカの統計教育がすぐれているかという点必ずしもそうでもなく、今、世界中で一緒になって、いろいろな統計教育の改革ということ、日本も含めて、メンバーとしているいろいろとやっています。やっぱりもともとは、統計学者を育てるための教育ということに主眼があったり、コンピューターが発達する前の、自分たちで集めたデータを自分たちで計算しないといけない、そのためのアルゴリズムをきちんと理解するような統計教育というのをずっとやってきた。もともと教科書がそういう形でつくられていたので、計算式ばかり書いてあった。

ところが今、コンピューターがこうやって出てきて計算は任せられるし、もっと言うと、民主主義の基本として、統計をきちんと理解するということがないと、政策評価ができないということもあります。そういう意味でも、統計教育を変えていかないといけない中で、例えば立教大学で、当然、統計教育に携わる者というのが学部でばらばらにいたり、私は経営学部の中で言うと、白石先生はどちらかという点、統計学会員でもありますので比較的近いんですけども、学部によってはほとんどばらばらで、でも統計教育は各学部に、どうかすると必修に近い形で置かれているけど専任はいないというようなことも結構あると。

英語教育であったり、特に日本人学生にとっては多分英語教育であったり、初習言語の教育がもともと専門教育を支える上で必要なものだったり、その後の社会人生活を支える上で必要なもので、ところがメインストリームにはならないわけです。そういうものを高等教育、もしくは、もっと言うと、統計教育に関わっている者は、学習指導要領の改定のところで、結構すごいバトルを、数学の専門家の人たちとやっているんです。私自身、数学科出身なので、なぜ数学者がそう

いうところでバトルをしたいかという意図はわかります。ただ、先ほどお2人の講演を聞いていた中で、どういう視点で、そのプログラムを評価していくか、その中身を充実していくかというときに、それぞれの分野ごとに主張をし出すと、それは、その分野は拡大路線、ある意味生き残りということになってしまいます。

ただ、学習者の観点から言うと、限られた時間、その中でどういうふうなバランスで勉強していくかということが大切になっていくはずです。だから、例えば統計学の立場で言うと、統計学はいっぱいやってほしいんだけど、それで例えば124単位のうちの大半をといると、それは多分あり得ない。その中でどういうバランスでやっていくかということを中心に考えると意味で言うと、分野を超えた形でトータルな議論をしないといけなくて、特に東京の場合は、日本の場合は今、実は小中校の段階、いわゆるスクールレベルでもかなり入れていくということが政府の方針として入っていて、それはなぜかということ、大学進学率が50%であるときに、Higher Education の中だけで統計教育をやっている、大学に行かない人たちが、例えば国が出す統計に対して批判的な目を持ってないというのはやっぱりまずいだろうということで、統計を学習できる機会を入れていくということで少しずつ入っていった。ただ、どこまで入れればいいのかということについてはトータルで議論しないといけなくて、そういうことを考えながら、実は今日の話も聞いていますし、大学全体の中の教育改革を進める上で、どうバランスをとればいいのかを考えています。

私自身が経営学部において、もしくはその前は社会学部にいましたが、自分自身が一種のメインストリームにならない立場でずっと仕事をしてきたので、池田先生のおっしゃる意味というのは、結構いろいろな形でわかっていて、その中で、どういう存在感を持たせるかということと、池田先生が最後にまとめてもらったような形ということは、やっぱり結構大切だと思います。ということが大学全体の中の役割として今、来ているかということと、いろいろなところとコミュニケーションをとるところが多分大切だと思いますので、そういうことを含めて話をしていきたいと思っています。【スライド③-1】

私に課せられたところと言うと、多分国際化と、今、池田先生がおっしゃった日本語教育センターの役割、国際化を進める上での役割というところがあまり明確ではないというような指摘だったと思います。実はいろいろな数値目標も含めて「Rikkyo Global 24」を設定して、それをベースにスーパーグローバルの採

沢に至りました。昨年のレポートの中ではいろいろとコメントされていたと思いますが、そこで、実際はこれだけ期待していますよみたいな話をちょっとしたいと思います。特にこの海外連携であったり、留学生受け入れというところで言うと、日本語教育センターなしにはもうあり得ない。その数値目標を達成するためには不可欠で、なおかつ、あまりお金の話をするとあれなんです、自立セクターになってほしいというのが正直なところ。持続可能なセンター運営をしようということを考えると、一定程度、きちんとした形での黒字化ということを目指さないといけなくて、これは実は大学全体、特に私立大学の場合、国にそう頼った形で運営をしていくというわけにはいきませんので、きちんとした形の収支が成り立つ収入を得られる、そのためには高いレベルのプログラムの提供、それを支えるということで、多分評価ということにそこでつながってくるのではないかと思います。その辺を最後のところでちょっと話したいと思います。【スライド③-2】

まず「Rikkyo Global 24」とスーパーグローバル、すみません、TGUと書いているのは、ご存じの方はご存じだと思いますけれども、実はSGUと前は書いていたんですけれども、あれはSapporo Gakuin Universityの商標だということで、文科省のほうからSGUという言葉は使うなということになりましたので、今、このスライドの中は全部TGUになっているのは、Top Global Universityということで使っていますので、そこだけご注意ください。前のSGUと全く一緒です。【スライド③-3】

これ自体は、ここから数枚は、立教大学が既に公開しているスライドをそのまま使っていますので、ここ向けに、この辺のスライドをつくったというわけではなくて、既に公開しているものです。実際のSGUというか、TGUの調書の中で、カリキュラムの改革だったり、学生の意識の改革であったり、ガバナンスの改革であったりということを組み合わせて、具体的には「Rikkyo Global 24」という140周年の昨年、そこから10年後の2024年に向けて、どういう国際化を進めるかということの戦略、その中には具体的な数値目標を含めて設定したと。ここで育てたいというときに、今まで140年間の、これまでの伝統であるリベラルアーツ教育と、先進的なリーダーシップ教育を組み合わせた形で、ちょっとすみません、ここの中には書いていませんけど、総長の言葉で言うと、アジアの中で際立つ、世界の中できちんと認識してもらえよう、いわゆる世界を意識

した大学であるということを言っています。

実は日本の大学は、ある意味、日本の学生向けの教育をするということをずっとやってきた。1つは、日本語で専門教育、母語で専門教育を受けられるという、そういう機会を戦後ずっと提供してきた。それ自身は非常に重要なことだったと思います。日本が戦後復興して、いわゆる高度成長を遂げるという中で、そういう日本語によって高度な教育を受けられた。日本に住んでいる人たちに対してそれを提供してきたということは非常に重要であったと思いますが、日本が国際化していく中で、それだけでは今だめで、世界に人材を輩出しないといけないのと、世界に対して、我々の研究や教育というものをきちんと提供するということを今は求められていると思います。そういうことをきちんと実践する。そういう意味で言うと、受け入れる学生というのは必ずしも日本に住んでいる人だけではない。海外からも受け入れないといけないし、日本で生活している人たちも、将来海外でいろいろな活躍をしてもらわないといけないので、そこに出せるような、そこを目指していこうというのが、ここの構想です。【スライド③-4】

特に日本人学生向けというか、日本で育った人たち向けということで言うと、日本は若い人たちにとって、ものすごく生活がしやすい場所で、その人たちが世界中どこでも、あともう1つは、誰とでも一緒にチームとして力を発揮できる、そういう人材を立教大学は育てていくというので、リベラルアーツだったり、リーダーシップというキーワードをもとに、そういう教育方針で新たなプログラムというのを開発していくと。自ら考え、行動し、世界とともに生きる新しいグローバルリーダーを育てるということが、一番の目的になっています。

ですからこのときに、例えば社会人になったときに、いろいろなところで働く可能性があるし、いろいろな人たちと一緒にになって仕事をやる可能性がある。その可能性を排除してほしくない。それぞれ自分たちが、例えば専門学部である、例えば大学院も含めて、実力を身につけたときに、その実力を、誰とでも、どこでも発揮できる。そのために必要なものというのをきちんと立教大学で備えていくということが、ここの中の一番大きなメッセージなのではないかと思います。

あともう1つ、実はリーダーシップ教育ということで、最初の田丸先生の講演の中で、1つ非常に気になったのが、評価されていることになれないという言葉があったと思います。実は立教大学で言うリーダーシップ教育の中で言うと、評価されるということを頻繁に受けながら、それをきちんと受け入れながら自分

を変えていく。自己変革力というところで言うと、そういうところも入っています。ですから世界中の人たちと一緒に仕事をしようとするときに、きちんと評価をされて、それを受け入れながら自分を改善していくというのは非常に大切で、そのこと自体ができるような人を増やしていきたい。日本は多分、我々の世代なんかも、評価されるということに対して、特に友達から直接、何かいろいろな評価を受けるということについては非常に苦手意識があったり、おまえ何でそんなこと言うんだみたいな形になって、それを素直に聞き入れられるということが、立教大学で言う、リーダーシップ教育の中で言うと結構重要なところかなというふうに思っています。これは今日の直接的なところとは関係ないのですが、そういうことも意識したプログラムだというふうに思っていただければと思います。【スライド③-5】

ここからがちょっと具体的な数字で、この数字自体は、多分去年、池田先生がこうやって出されて、全然日本語教育と関係ないやというようなコメントだったような気がします。これからそこについての誤解をちょっと解きたいと思います。数字については、送り出しは、例えば 10 年後までに全員送ります。また 2,000 人受け入れます。あとは協定についても 300 大学というようなことを言っていたり、これはちょっと英語の入試の話なのであれですけど、外部試験というか、いわゆる 4 技能試験ということを重視していくということで、入学定員



の50%ぐらいまで目指しましょう、このような数値目標が入っています。【スライド③-6】すみません、教育の話、ここはちょっと飛ばします。【スライド③-7】

具体的にこの構想の中で大学の学びがどういうふうになくなっていくかということとを、ちょっと話をして、日本語のほうとつなげたいと思いますが、まず、基本的に英語で学ぶということを増やしていきたい。これは日本人が英語で学ぶということもありますし、こういう言い方をすると、一部の人からは、本当にそうなのと言われかねないんですが、私自身は立教大学で行われている、学部も含め、大学院も含め、かなり高度な、世界的に誇れるような教育というのが展開されていると思っています。それを例えば日本語だけで言葉の壁があり、世界中に展開できていないというのはもったいないという意識があり、同じようなレベルのことをきちんと展開し、英語だけで卒業できるようなコースを新設するということをやっているというのが、この中の1つです。これだと日本語は関係なさそうに思えるんですけど、この部分があるからこそ、実は日本語教育センターというのが非常に重要なんだという話を後ほどしたいと思います。

あと、この辺は、日本の学生を外に送り出すという意味が非常に強いので、大学が世界を知る入り口というか、いわゆる大学に入ること、立教大学に来ることによって、世界とそのままつながっていますよ。これは連携の大学であったり、研究機関であったりというところを300以上に増やしますというところと関わってくるかと思います。さまざまな短期プログラムを増やしていきますということもここに關わるかと思っています。

もう1つ、実は大学、特に日本の大学だけじゃないと思いますが、大学というのは、世界から学生を受け入れて、優秀な人材をそこに定着させるという役割を持てると思います。これから日本が、いわゆる人口減少の時代を迎えて、どんどん、どんどん、人口が減っていく。少なくともここ20年間は人口が減っていく方向で動き続けるのは間違いありません。今のままで言えば。そのときに、優秀な、いろいろな人材を受け入れるというときに、この大学の果たす役割というのは多分大きいと思います。今まで立教大学は、どういう形で留学生を受け入れていたかということ、日本語ができる学生ということをまず念頭に置いて、日本語ができるようになってから立教大学に来てください、でした。それを大幅に変えたいということです。

例えば、英語コースをつくるということもそうなんですけども、英語がとりあえずできれば、立教大学で学べる。日本語は、当然日本の大学ですからやってほしい。というか、基本的には、やらないといけないと思います。生活するにおいても。日本のことについて学ぶから、日本にある立教大学に来ると思いますので、そういう意味で言うと、できるようになったからではなくて、とりあえず来たら、後で立教で日本語が学べるんだというふうにしていきたい。今までは日本語のバリアというのがあるので来られなかった優秀な人材というのを日本へ呼びたい。それが、どちらかというところの英語による専門科目の増加であったり、英語だけで卒業できるコースの新設というところにつながると。

ここからが、なぜこういう数字が日本語教育センターと関わるのかということ でちょっと話をしたいのですが、まず 2,000 人の留学生を受け入れようと思ったときに、日本語が完全にできるようになってから来てくださいということで、これを達成しようというのはほぼ無理だと思います。今でも日本語教育センターにはお願いをして、連携を取ってもらっていますが、経営学研究科の中の 1 つの専攻は、日本語要件を全く課していません。全ての手続から終了するまで、全部英語だけで完了できるようになっています。でもそこは、スタートして何年になるのか、10 年近くなるとは思いますが、実は日本語を学びたいという要請があって、3 年ぐらい前から、日本語教育センターにお願いをして、全く日本語を要件としていないんですけども、それを学べるようにしてもらって、大学院のほうと日本語教育センターのほうで連携を取ってもらって、そのプログラムを展開してもらっています。

ですから、この中で実は日本語ができない留学生を受け入れて、日本語は立教に来た後で学ぶというところで言うと、非常に日本語教育センターにお願いをしないといけないところがたくさんある。日本語や、日本語関連のことを学ぶ留学生の受け入れもしたい。実はここに 2,000 人というふうに書いていますが、まだ正式に大学の中で、きちんとした合意を全体として取っていませんが、2,000 人のうちの何割か、例えば 4 割から 5 割が学位取得のプログラム、学位取得というのは学部 of 学生も含めてですね。4 年間もしくは大学院で言うと修士の学位、もしくは博士の学位を取ろうというのが 4 割から 5 割の間です。残りは、そうすると 1,000 名近くになるとは思いますが、交換留学であったり、短期プログラムで立教大学に来てもらう、そういう形で 2,000 人の留学生というこ

とを実は考えています。

ですから、学位プログラムの場合のところ以上に、日本語ができない学生が来るというところは、もっともっとこれから大きくなっていくと思います。ですから、この部分のところで言うと、かなりの部分、実は日本語教育センターのほうに、いろいろな教育プログラムを、新しく展開をしてもらうということを要請しないといけません。単に頼むだけということでは当然引き受けてもらえないので、そのときにきちんと、人、金をつけるということになると思います。【スライド

③-8】

この受け入れは、大学経営に対して、よく大学経営のことをご存じの方は、これだけの数を受け入れるとかなりのコストがかかるということは一方でご存じなんではないかと思います。でも、それだと日本人の学生からお金を集めて、海外の留学生に対してサービスをするみたいなことになってしまうので、それは避けたいというふうに大学としては思っています。きちんと受ける人、そこからお金を出してもらうということが必要なので、そういう意味で、日本語教育センターのほうのプログラムでは、次年度、短期プログラムの開発をお願いして進めています。多分、他大学よりも高い。高いですよ。ごめんなさい、他大学というのは日本の他大学です。実は日本の他大学で、もしここに関係している方がいらっしゃったら申しわけないのですが、ディスカウントし過ぎ。あれだと持続可能ではないので、もうちょっとお金を上げて、魅力的なプログラムで呼ぶということをやらないと、多分日本の大学で、いわゆるサマーコースをつくっていくということが、日本だったらこんな安くてできるというふうに思われてしまい、各大学ができなくなってしまうので、その辺はきちんと、かかるコストは要求するという形でやっていかないと、持続可能でなくなると思います。例えばこういう補助金がなくなってしまうと、自分たちでその後をやっていかないといけないので、その辺は強く思います。【スライド③-9, 10】

それからもう 1 つ、海外協定校数を 300 にするという立教大学は言っていますが、日本語教育の充実というのが、協定校を増やす 1 つの鍵だということに考えています。もう 1 つは、日本語教育自体の海外との連携、これで協定校を増やすということも非常に重要だと思います。実は海外の大学と、私自身も今こういう立場なので、いろいろな折衝をすることが多くて、幾つかの大学を回っていますが、立教大学の日本語教育のプログラムというのは、よく紹介を

します。正課としてのプログラムの位置づけや、特に多様なレベルでの少人数教育ということについては、かなり評価が高くて、そこには送りたいというようなことを言われます。ですから、そういうことを含めて、立教大学の日本語教育センターと海外大学の日本語教育に携わる部署、そういうところと研究交流ということの推進というのが、実は海外大学との連携を進める上の足がかりになって、それが大学間連携につながっていく、みたいな形で連携を進めていければと思います。

ここで、池田先生が言われている、ここに「研究」と入っているところがみそで、実は研究がない中で、単に連携というのはなかなか難しいというのがありますので、今後、池田先生にはちょっとだけ黙っておいてもらいながら進めていきたいというようなことは正直思っています。問題は、だから教育と研究のバランスをどうするかとか、あと、いわゆるお金の問題も含めて、実は今、かなり無理をしながら日本語教育センターにはたくさんのプログラムをお願いしています。勝手に、個人的には、来年1つと言っていますけど、多分3月にもう一個と。1つは了解してもらっていると思いますが、その後、3月であるとか、実は来年やるプログラムは6月、7月です。学期中にやろうとしている。そうすると8月、9月があいているしというようなことも考えています。プログラムをいろいろな形で展開することというのが、日本語に対しての世界的なニーズを掘り起こすこと、また、日本ファンを増やすということにつながっていくと思いますので、なるべくそういう拡大を、これから考えていきたいと思っています。あとちょっとだけ、大丈夫ですか。【スライド③-11】

最後に期待することということで幾つかまとめています。【スライド③-12】今まで言ってきたことがだいたい主ですが、池田先生がご指摘になっていたことで言うと、いろいろなところとコミュニケーションということが多分あったと思います。特にこれから多様な要請に対応してもらおうということで言うと、この多様な要請というのはどこから来るか。それは海外からであったり、または学部研究科からだったりもすると思います。

今、実は池田先生のプレゼンの中では、存在感がというようなことをおっしゃっていたんですが、非常に立教大学の日本語教育センターというのは、立教大学の中でも、池田先生が思っている以上に知られているんです。その辺をもう少し、自信を持ってというか、連携してやっていけば、多分学部研究科との

連携であったり、特に研究者を受け入れたり、例えば長期の研究者であるときに、ことしから研究者として来てもらっている人たちにも、授業のほうに参加してもらうようなことを進めています。だんだんそういう形で連携が深まっていけば、いろいろな要望が出てくる。その中で存在感というのを高めていくということをやっていただければと思います。

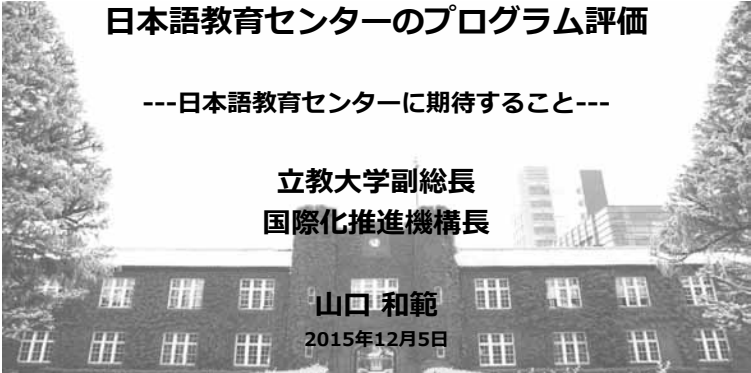
あと最後に、先ほども言いましたけども、ぜひ力を入れていただきたいというのが、海外大学との日本語教育の連携で、これは教育も含めて、教育というか、研究も含めての連携ということをやっていただくことが、立教大学の日本語教育のプログラムの充実、それ自体が世界に対しての貢献ということに多分なっていくと思います。今、立教大学自体が国際化を進めるというのは、立教大学が世界に対してきちんと貢献できる大学、そういう意味合いというのを高めていくということだと思っていますので、そういう意味でも下のところは、非常に私としては強調しておきたいと思います。

以上で私のほうからは話を終えたいと思います。どうもありがとうございました。**【スライド③-13】**

○**栗田** 山口先生、ありがとうございました。

それではただいまより休憩に入りたいと思います。第2部開始は16時ちょうどとさせていただきます。なお、本日は同じフロアで学部生を対象といたしました英語統一テストが行われております。リスニングテストも実施しておりますので、大変恐れ入りますが、休憩中もロビーではお静かにお願いいたします。

【スライド③-1】




**大学の国際化の観点から期待する
日本語教育センターのプログラム評価**

---日本語教育センターに期待すること---

**立教大学副総長
国際化推進機構長**

山口 和範
2015年12月5日

【スライド③-2】

本日の内容  **立教大学**

1. 立教大学の国際化
Rikkyo Global 24 とTGU
2. 海外連携と留学生受け入れ
3. 今後の課題と期待

2

【スライド③-3】

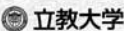


1. 立教大学の国際化構想

Rikkyo Global 24 とTGU構想

3

【スライド③-4】



立教大学のTGU構想の概要

- ・ **オンリーワンの取組をさらに改良・推進**
140年に及ぶリベラルアーツ教育、先進的なリーダーシップ教育
- ・ **世界水準の教育システムの構築**
欧米のリベラルアーツ大学とのネットワークと対話

「カリキュラム」の改革

- 『グローバル教養副専攻』の開設
- 『グローバル・リベラルアーツプログラム』の開設

↔

「学生の意識」の改革

- 『学びの技法』『学びの精神』の修得
- リーダーシップ・プログラムの正課外活動への展開

RIKKYO
GLOBAL
24

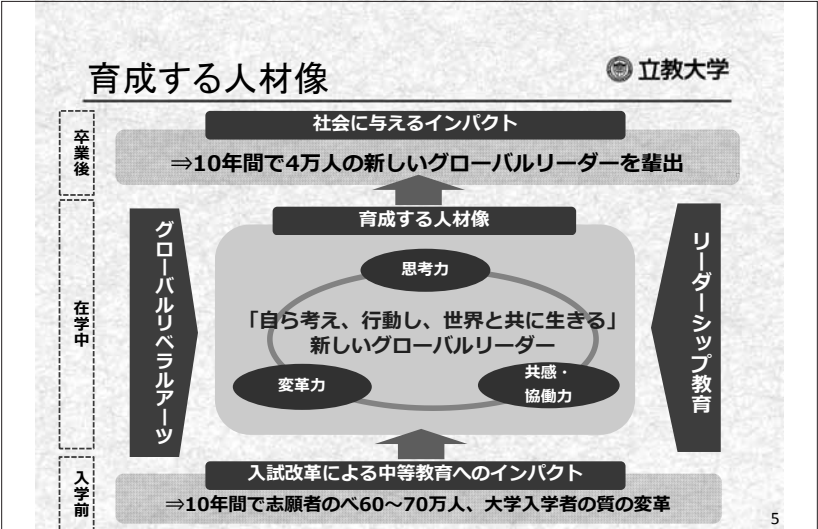
「ガバナンス」の改革

- 総長のリーダーシップによるガバナンス
- 教育の質保証

- 国際通用性のある人事・研修制度
- 入試制度改革
- 教育情報の徹底的な公表

4

【スライド③-5】



【スライド③-6】

立教大学

TGU構想の達成目標

	2013年度	2016年度	2019年度	2023年度
学生の送出し	20～25%の学生	30%の学生	50%の学生	全学生100%
留学生の受入れ	750人の留学生	1,000人の留学生	1,500人の留学生	2,000人の留学生
海外協定校数	123大学	150大学	210大学	300大学
英語試験の入試活用	入学定員の1.3%	入学定員の10.0%	入学定員の50.0%	

6

【スライド③-7】

カリキュラム改革の主な取り組み

■ 学士課程統合カリキュラムの展開 (2016年度～)
4年間で3期に分け、全学の教育体系を再構築 (正課・正課外教育の融合)

「学びの技法」・「学びの精神」

立教サービスマーケティング

4年間を通じた
徹底的な異文化・外国語教育

■ GLAPとグローバル教養副専攻の展開を軸とした全学の教育改革 (縦軸と横軸の改革)

GLAPの展開 (縦軸の改革)

10学部の一多様性を活かしたグローバル教養副専攻を新たに展開 (横軸の改革)

専門教育	全学共通 カリキュラム	言語教育・ 異文化教育	キャリア教育・ 正課外教育	
	連携リベラルアーツ副専攻			<ul style="list-style-type: none"> 日本人学生の海外経験促進 英語による授業科目の拡大 柔軟な学事暦の導入 シラバスの英文化 JMOOC等を通じた授業の積極的公開 奨学金・混住型学生宿舎の拡充
	立教GLP副専攻			
	日本学副専攻			
	データサイエンス副専攻			
	立教チャレンジ副専攻 等			

全学改革先導プログラム

- 国際バカロレア、英語検定試験を活用した入試
- 特別奨学金の授与
- すべての講義を英語で展開
- 徹底的なチュートリアル教育
- アクティブ・ラーニングや反転授業を導入
- 1年間の海外留学

7

【スライド③-8】

TGU構想で大学の学びがどう変わるか

- ✓ 「英語を学ぶ」から「英語で学ぶ」へ
 - ⇒ 英語による教養・専門科目の増加
 - ⇒ 英語だけで卒業できるコースの新設
- ✓ 大学は世界を知る入口に
 - ⇒ キャンパスの国際化、海外体験、留学
 - ⇒ 常識・価値観が通用しないことを体感する
 - ⇒ 主体的な学びへのきっかけになる
- ✓ 大学は世界から学生を受け入れる
 - ⇒ 日本語ができる学生だけでなく、日本語は立教で学べる
 - ⇒ 優秀な人材を日本へ

8

【スライド③-9】

立教大学

2. 海外連携と留学生受け入れ

9

【スライド③-10】

立教大学

TGU構想の達成目標


	2013年度	2016年度	2019年度	2023年度
留学生の 受け入れ	750人の 留学生	→ 1,000人の 留学生	→ 1,500人の 留学生	→ 2,000人の 留学生
海外協定校 数	123大学	→ 150大学	→ 210大学	→ 300大学

受け入れと海外協定の数値目標

- ✓ 日本語ができない留学生を受け入れる。日本語は立教に着た後に学ぶ
- ✓ 日本語や日本関連のことを学ぶ留学生も受け入れを
- ✓ 日本語教育の充実が協定校を増やす一つのカギ

10

【スライド③-11】


 立教大学

海外大学との折衝で

- ✓ 正課プログラムとしての位置付け
- ✓ 多様なレベルでの少人数教育への評価
- ✓ 立教と海外大学との日本語教育およびその
研究交流への期待

11

【スライド③-12】

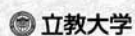
 立教大学

3. 今後の課題と期待

12

【スライド③-13】

期待すること



- ✓ 充実したプログラムの展開
- ✓ 多様な要請への対応
短期プログラムの充実と拡大
- ✓ 立教の学部・研究科との連携
- ✓ 海外大学の日本語教育との連携